

すぐ隣にある



"孤独死"

師歳以上の5人に1人がひとり暮らし。
少子高齢化、相続争い、家族の不仲……
独居老人の現実が、遺品から浮かび上がる。
あなたはいつ死んでもいいように
生きていますか？

日本初の「遺品整理業」を立ち上げた

「キーバース」代表 吉田 太一さん

冷たい雨が降りしきる中、北陸地方のあるマンションの前に、背む男女の姿があった。スーツ姿の男性の隣で、白いコートを羽織った30代の女性の憔悴した表情が、遠目にも見て取れる。「あのお、私……ここで待っていていいでしょうか？」「結構ですよ。終わりましたら、声をおかけしますから……。そうされたほうがいいと思いますよ」男性の言葉に、女性の表情が少しだけ和らいだ。その場に女性を残し、男性は「問題の」部屋の前に立ちドアをゆっくりと開けた。すると、とどまっていた空気が動き出したのか、強烈なおいとも勢よく飛び出てきたのは、おびただしい数のゴミブリだった……。

「遺品整理業」という仕事をこ存じだろうか。ひとり暮らしの人が亡くなった際、遺族に代わり故人の日用品や部屋の片づけを引き受けている専門業者のことだ。さらには形見分けの全国配送など、こまやかなサービスも提供している。この仕事を日本で最初に立ち上げたのが冒頭の男性——「キーバース」有会社代表の吉田太一さん（42）だ。東京、名古屋、大阪、福岡に事業所を構えている。吉田さんが、遺品整理に着目し、同社を設立したのは4年前。以来、これまでに4000件に及ぶ、さまざまな現場に遭遇してきた。その中には孤独死だけでなく自殺や殺人といった現場も含まれている。

この日、吉田さんが見積りのために出かけたのは、死後1か月が経過した現場で、依頼主は故人の妹だった。電気をつけて部屋の中に入ると、自殺したという布団の真ん中にできた血の塊は、すでに赤紫色に変色している。

「それこそ、夏場などは激しい臭いを放ちます。ですから賃貸の場合など、家を貸す側にとっても大変、不幸な出来事になるんです」吉田さんは長年、引越しや運送業などに携わってきたが、引越しと遺品整理の違いは、依頼者である本人がいないか、という点です。遺品整理は第三者が突然の遭遇して、時間のない中で依頼してくることがほとんどです。しかも死後、何日もたつて発見された場合、遺品を手元に置いておきたいという遺族の方は、そうそういるものではないですね。ですから、われわれは故人の遺品整理や回収だけでなく、部屋の掃除と原状回復から遺品の供養まで、幅広いご要望にお応えしています」少子高齢化、遺族の不仲、恋人同士の破局、人に知られたくない性癖……これは吉田さんが遭遇してきた、すぐ隣にある「現実」の物語である。

すぐ隣にある 「孤独死」

も脱サラでし、お前も好きなように生きろ！」と。大阪市立桜宮高校の体育科へ入学。スキーのインストラクターを目指していた。が、「お金もそんなにからないし、資格が取れば、少しして早く、世の中に出られるから」と、卒業後は調理師学校に進む。そして、神戸のホテルでの修業を経て1年後、職に25万円と包丁3本を入れて、上京。だが、働くあてなどない。そんなとき、たまたま目にしたのが、渋谷にある飲食店の募集広告だった。吉田さんは、その店の面接を受けることになる。

株式会社「新蔵」の小林定夫社長(59)の話。

「不思議な青年でね。面接のとき、いきなり5万円貸してくれませんかという。でも、目に勢いがある、この男は信じられるな」と。翌日から来てもらうことになった。だが、何をやるにも、とにかくメモを取ったり、学ぶことに貪欲で、仕事熱心でした。ここでは、働くことの厳しさ、そして経営者としての責任を学んだという。その後、大阪に戻った吉田さん。次に飛び込んだのが運送会社の「佐川急便」。当時、社員研修の厳しさは、業界でも有名だった。早朝5キロのランニングに始まり、腹筋は1000回……。

「もともと体育会系で、体力には自信があったし、板前の世界で、上下関係の厳しさはみっちり学んでいましたからね。これならいけるんじゃないかと」

その中で吉田さんは、研修生60人のリーダー的存在となっていく。



部屋の中はゴミが散乱し、強烈な異臭を放っていた……

「負けず嫌いなんですよ。先輩から早朝4時に出て来い！といわれたら、必ず1時間前には出社して、口うるさい先輩に、どうやら文句をいわれなくなるかを考えていましたよ(笑)」

そして87年、上京時の飲食店に勤めていたときに知り合った真由美さん(45)と23歳で結婚。その3年後には、早くも300万円で一戸建てを購入。なんと返済は、10年ローンだった。

「単純に30年先までローンに縛られるのは嫌やなあと思っただけです。まっ、働けばなんとかなるやろうと」

ところが、ある日突然「佐川急便」を辞めて、自分で商売を始めるといふ。

真由美夫人が述べた。

「辞めるときも一切相談もなかったし……。ちょうど下の子が生まれて8か月目だ、さすがに私もキレて、あんなに、いったい何してんの？、っていったら、いま釣りに行ってころや。って(笑)。でも不思議なもので、この人だったら、なんとかなるんじゃないかって思っていましたよ」

吉田さんは、高額の家のローン返済が実績となり、300万円の融資が受けられることに。そこで心機一転、軽自動車を購入して、大阪市内を中心に運送業を開始した。

高校時代からの友人である岡田義夫さん(42)がいう。「高校時代のスキーもそうでしたが、1度こうと決めたときの行動力と集中力はハンパじゃなかった。当時は、朝から晩まで車で大阪中を走り回って、車の中で仮眠して、また深夜に出て行くという生活でしたからね。奥さんも、それは大変やったと思いますよ」

気がつく、倉庫には引越しの際に出る不用品で、捨てるには忍びない品が、いっぱいになっていった。

(これ……何かに使えんやろか)

そんな発想から生まれたのが「ひっこしやさん」のリアル店舗ショールーム。この商売が大繁盛する。これを機に事業をさらに拡大し、99年5月、「吉田物流」株式会社を設立。吉田さん、35歳のときのことだ。

「引越しは、お客さんとかかわって一緒にいる時間が長いから、喜んでくれる時間も長い。お客さんの喜ぶ顔を見たいから、次第に、アンテナ工事から棚の取り付けまで、なんでもやるようになって」

吉田さんのサービス精神あふれるその仕事ぶりが口コミで広がっていき、通常の引越だけでなく、離婚後の荷物整理や倒産による夜逃げ

同然の引越しなど、さまざまな依頼が増えていった。その中であつたのが「死」の香りのあるような案件だった。「引越しをしていると、それらしいわけの案件はありましたが、こんなにあるとは思っていませんでした。で、これはもしかしたら、需要があるんじゃないかと……」

ここでまた、集中力と行動力が発揮される。

「遺品整理がビジネスになるかどうか、日本全国の葬儀社

「一気に布団をめくると、そこは『蛆虫のふ化場』に！」

真夏の日光差しが照りつける7月のある日……

葬儀社から紹介を受けて吉田さんが向かった先は、関西のとある4階建ての公営団地。現場は孤独死を遂げた75歳のひとり暮らしの男性が住

んでいた、3階の角部屋だ。死後1か月たつて発見されたという。依頼主の息子との待ち合わせ場所となつた1階には、すでに異臭が漂い、階段を上ると2階の踊り場に蛆虫が這い回っていた。

(ひょっとすると、とんでもない状態になっているかもしれない……)

蛆虫の道筋をなぞるように3階へ上がり、その部屋の中へ。亡くなつていたという和室にあつた掛け布団の一部が、人型のように変色していた。最初は布団にくるまって息絶えたのだらう——吉田さんが一気に布団をめくると、そこはすでに蛆虫のふ化場と化していた。

(やっばり……)

それらを除去して外へ出ると、先ほどまで一緒にいた依頼主の息子が、どうしたわけか、4階の窓から顔を出している。

「すみません……。いま下りていきます。ちょっと自分の部屋に戻っていたので……」

「自分の部屋?……いいですよ、ひょっとして4階がお宅なんですか?」

その息子のあつけられかんとした様子に、吉田さんはア然とした。

「実は、息子さんのところも『ゴミ部屋』だったため、下

の部屋の異臭に気がつかなかったというんです。こういういたケースは実際、多いんです。中には同じ敷地で暮らしているが、親族の死に気がつかないということもあるくらいです」

厚生労働省の「国民生活基礎調査」によると65歳以上のひとり暮らしの割合は、年々増加する一方で、'05年には22%、なんと5人に1人の割合になる。実際、吉田さんが立ち会った案件も4年で1000件を超えるという。

「しかも、3階の部屋にはエアコンがついておらず、携帯電話はおろか、固定電話さえ引いていない。まさに、都会の孤島です。壊れかけのテレビ、散らかった埃など、まっぴらな状態。埃など部屋の中が全然、動いていない。時間がビタッと止まっているんですね。はたして故人は365日のうち、いったい何日、人としてやっていたのか、あととよんで20年、30年と過ごしてきたかと思うと、胸が詰まりますよ」

孤独死同様、自殺現場の整理依頼も少なくない。

残暑が残る9月下旬のこと。依頼主は40歳を少し過ぎた男性だった。

「それじゃ、よろしくお願います。僕はこっちで待つますから……」

すぐ隣にある "孤独死"

立ち会いたくないという男性をその場に残し、部屋に入った吉田さん。が、目の前には、息を呑む惨状が広がっていたという。

「あたり一面が血だらけで、室内はメチャクチャ。暴力団の抗争があったといわれても納得してしまうような状況でした」

この部屋の持ち主は、依頼主である息子の母親だった。「刃物による自殺ということでしたが、ひどく苦しめられた人たちが静かに死んでいくといいますが、あれはテレビや映画の世界の話。これが、現実なんです」

苦痛に耐えかねて自ら警察に通報した、プラスチック製の受話器には、くっきりと血の字形が残っていた。

そして、さらに凄惨な極めるのが、殺人現場だ。現場となったのは関東地方の10階建てマンションの一室。依頼主は亡くなった22歳の娘の父親。死因は放火による焼死だった。

吉田さんが現場に着いたときには、火事現場特有の刺激臭がまだ残っていた。

「家出同然で家を飛び出して2日前に警察から電話があった。押付けてみると……。布団に寝ている間に同棲相手の男から灯油をかけられ、火をつけられたということでした」

ただ、突然立ち尽くす父親。親。

「さんさん心配かけやがって……。親の意見も聞かずに最期はこのさまで……」

絞り出すような父親の声に



声をかける言葉が見当たらない。原因不明の突然死のケースも少なくないという。

「勉強中に突然死してしまっただけで、結局、火災による部屋に請求されたそうです。やりきれませんよね、まったく……」

あまり知られていないが、原因不明の突然死のケースも少なくないという。

「勉強中に突然死してしまっただけで、結局、火災による部屋に請求されたそうです。やりきれませんよね、まったく……」

「ああお、あまり見ないほうがいいんじゃないか……」

慌てて声をかける吉田さんに母親は、

「いいえ、大丈夫……わかってますから……」

そういって、すまなそうに頭を下げたという。

「生まれてくることと違い、死は時と場所を選ばずにやって来ます。そしてその後、受け止めるのは遺族なんです。知られたくない秘密が公になることもあるでしょうし、時には、損害賠償請求されることもあるでしょう。失われるのは、生命だけではないということです」



吉田さんは休む間もなく、次なる依頼先へと向かって行った……

死んでまで、家族や周囲に迷惑をかけないために……

吉田さんは、これまでの経験をブログに書きつづり、昨年「遺品整理屋は見た」(扶桑社刊)として出版した。

「この仕事をして4年。さまざまな現場を見てきました。ときどき考えるのは、果たしてこの人は、本当に長生きしたかったのだろうかということ。自らの生命を絶つこともできず、かといって何日も誰とも会話することもなく、ただひたすら暗い部屋の中で

じっと死を待っている……。もしかしたら、本当は早く死にたかったんじゃないのかとね。よく自分の人生は充実していなかった。つまらない人生だったという方がいます。これはたぶん自分の死を想定してこなかったからだと思ふんですね。人間は必ず、死にます。だったら一度、自分の人生の期限を決めてみる。たとえば、僕が70歳まで生きるとしたら、あと28年しかありません。のんびりしていたら、あっという間にタイムオーバーになってしまう

うんです。だから、そうならないためにも、まずやりたいことをピックアップしてみます。目標はなんでもいい。世界一周がしてみたい。英語がしゃべれるようになりたい。夢のような目標でもいいじゃないですか。そしたら生きることが出るだろうし、少なくともその間は充実するでしょう。むしろ、家族は長生きすることを望むかもしれません。でも、人生を諦めるのではなく、意義に生きるために自分の人生に期限を決めてみる。そうすれば、仮にその年で亡くなっても、自分も周りの人たちが納得できるのではないのでしょうか」

今年1月下旬のこの日、愛知県にある「キーパース」本社では、合同供養が行われていた。

仏壇や布団、絵画や掛け軸など、さまざまな遺品が供養されていく。と、その中に、なんと数枚の遺影までもが見える。

「そうなんです。中には遺影ですら、いらないから処分してくださいという方もいるんです。生前どんな関係があったかはわかりませんが、まさか死に様こそ、生き様なんだと思いますね」

吉田さんはそういうと、ゆつくりと目を閉じて、両手を

合わせた。

「あるとき、訪ねて来られた60代の男性がこういうんです。明日は何が起こるかわからない。だからこそ、自分の意志で死後の遺品整理を申し込めるときに予約しておきたい。とね。われわれも、20年後でも30年後でもキチンと対応しますが、そのときにはお任せください」と申し上げました」

するとその男性は、ニッコリと笑って頭を下げた。

「これで、いつでも安心して死ねます。ありがたうございました」

吉田さんはいう。

「僕は、遺品整理は天国へのお引越しの手伝いで、合同供養は家財のお引越しの手伝いだと思っているんです。故人が残していた遺品は、ひとりの人間が生きてきた証。言い換えれば、人生そのものです。だからこそ、いつ死んでも、残った家族や周囲に迷惑をかけないよう用意しておくということが、充実したいまを生きるために必要なことなのかもしれませんね」

突然、電話が鳴った。

「はい、キーパースです。遺品整理の件ですね、いまからお伺いします……」

取材・文/山川敦司
撮影/安部俊太郎

